

(2) 水城と大宰府都城

1) 水城跡研究史の再認識

六国史に登場する水城に関する史料は周知されている次の2つである。

水城築造と
百済高官

天智天皇3年(664)

是歳、於_{つしま}対馬嶋・_{いさしま}壱岐嶋・_{つくしのくに}筑紫國等、置_{さきもり}防興烽_{すずみ}。又於_{おおつづみ}筑紫、築_{おほしほ}大堤_{なづみ}貯_{たくわ}水。名曰_{みづき}水城_{みづき}。(日本書紀)

天平神護元年(765)

三月_(10日)辛丑、大宰大貳從四位下佐伯宿禰_{いませみし}今毛人爲_{いとのきをきづく}築怡土城_{うねめ}專知官_{きよ}。少貳從五位下采女朝臣清庭爲_{にわ}修理水城_{しゆりみづき}專知官_{しゆりみづき}。(続日本紀)

663年に百済の復興をめざして渡海したわが国からの援軍は、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗したことは著名な史実である。その結果、わが国は連合軍侵攻の脅威にさらされることとなり、西日本防衛のための緊急対策に迫られる事態となった。その最初の対応が664年のこの記事である。対馬・壱岐・筑紫国に防衛軍と烽火施設を設けたことはけだし当然のことである。同時に貯水する大堤を構築したという記事は、これまでのわが国の戦史に見えなかった新しい構造の防塁線築造の事実を伝えるものであった。書紀はさらに翌年8月条に達率憶礼福留、達率四比福夫を遣して大野城、椽二城を築かしめたことを記している。達率は百済の官位16階の第2位にあたる高官である。天智紀2年(663)9月甲戌(24日)条には憶礼福留ほか3名の高官の名がみえ翌日本に船発ちしたことがみえる。また天智紀10年(671)正月条には賜姓記事がみえ、「兵法に_{かん}閑えり」と註されていて兵法家であったことが知られる。水城築堤の前年からこれら兵法家高官のわが国への渡来があったことからして、水城築堤にもかかわっていたであろうことは容易に推察できる。そしておそらく水城の発想も百済系兵法から出たものかと予察されるであろう。

さらに13世紀に降っては『八幡愚童記』(文永11年・1274)に、

中・近世の
水城

「水木城と申すは、前に深田にて道一すちあるのみ、うしろは野原ひろくつゝきて、水木おほくゆたかなり。(中略)左右山あひ三十餘町をすかして、石もて高くきひしく築たり。城戸口には磐石門を立てり。今は礎石はかりになりけり。」

とあって現在の水城東門跡のあたりと思われる。近世に至っては貝原篤信の『筑前国続風土記』、青柳種信の『筑前国続風土記拾遺』で水城に関する詳細な記述が見られるようになった。

「今其堤を見るに、高さ五間、根盤二十七間、東西に長き事八町許にして、其間たえて堤なき所一町許あり。堤の内は田と成て水をたくはへす。元禄十二年⁽¹⁶⁹⁹⁾此堤の辺の田をほりしに、大なる木二有て掘出しける。長さ三間許、小口二尺余あり。一本は杉、一本は朽て見分す。此土堤を築し時の台木なるへし。(中略)其東の大路のすちに、門の址にや、大なる礎猶残れり。水城の関といへるは此所なるへし。」(『筑前国続風土記』巻之九・御笠郡下・水城)

「村の南方東西の山間に阿子大堤なり往昔は堤の内に川水を堰入て水を湛たり故に水城といふ。(中略)太宰府の外堀也堤の中東西に両門を開けり東は席田の久爾糟屋_{ひなもり}の夷守等の駅を経て京に上る官路也西門者博多また肥前松浦等に至る府の大道といひたりしも是なるへし堤の北面には大石を疊て石壁を築たれば水城関とも崑垣関ともいへり今此堤の長を計るに東の山際より中

間堤の絶たる所まで百七拾間^{先内十間は東の通路より山際迄の間数}中間、堤の断たる所百間^{西方三百五十間}西方三百五十間^{北内五十間}は西の通計長六百二十間高五間有盤根は或者三十間或者五十間地勢によりて広狹有いにしへは猶高大なりしなるべし近世に至りて土を引渚水を埋て田圃を開けり今より二十年前までは田中に大石多く連りて有西門の址には礎石も巖然として有其辺に古瓦も多く散在せしか近年土民等川溝の修補に其石を取用ひしかは今は此所にも夫とおなしき石一つも見えず」(『高前町誌』)

以上のように貝原、青柳両氏によって具体的に法量が示され、東・西両門と礎石の存在が紹介された。上記2書以降の諸書にも水城大堤の長さ・高さがみえるが、若干の異同がある。こ

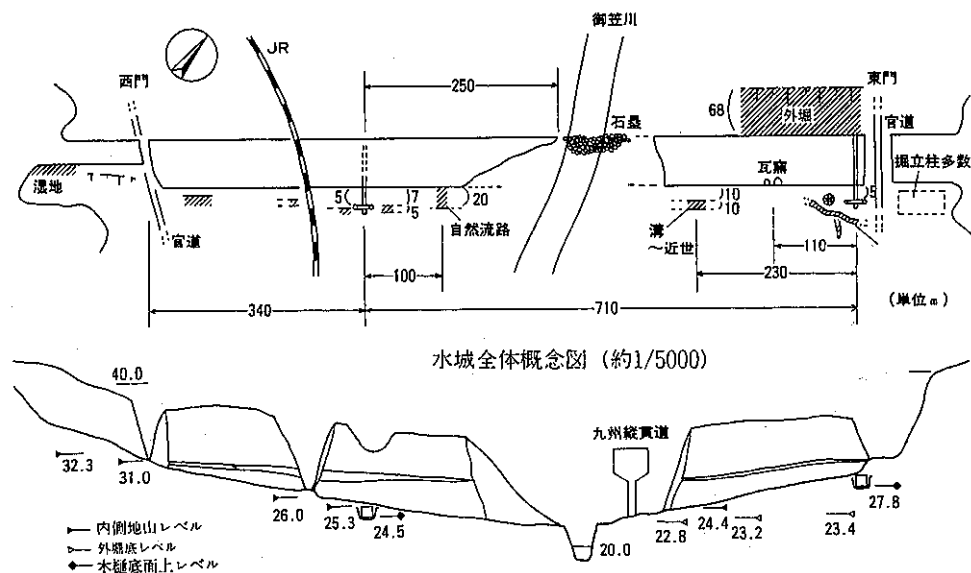
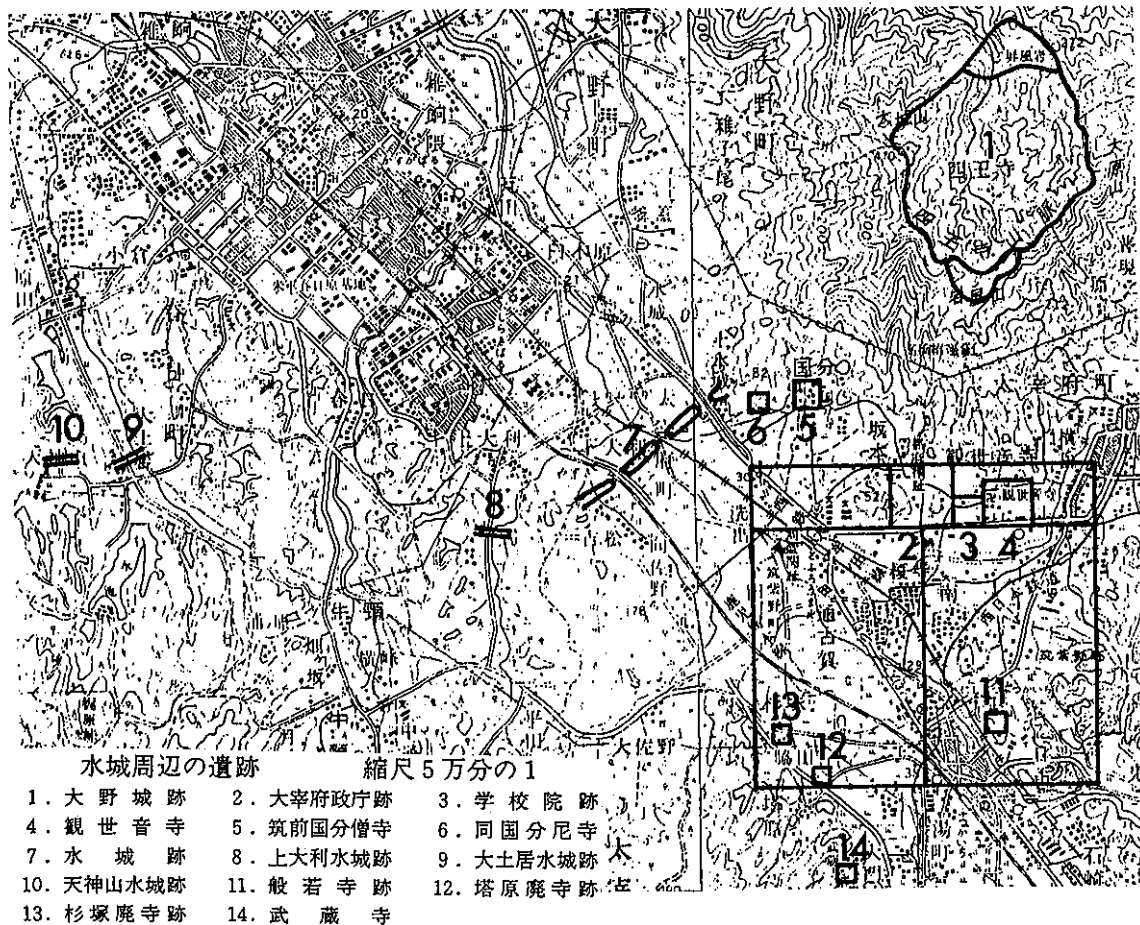
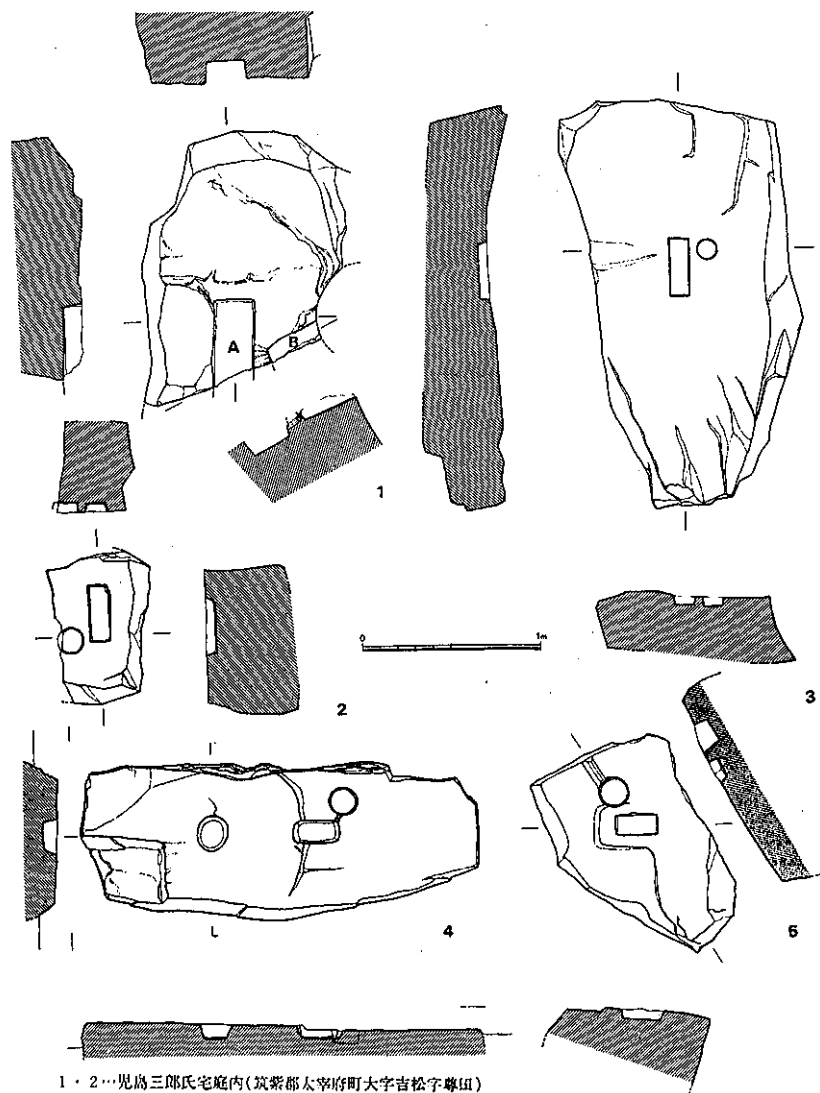


Fig.263 水城周辺の遺跡 (上)と水城レベル概念図 (下)

(標高 m)



- 1・2……児島三郎氏宅庭内(筑紫郡太宰府町大字吉松字尊田)
 3……百田新吾氏宅庭内(筑紫郡太宰府町大字吉松字神ノ前)
 4……東門推定地内(筑紫郡太宰府町大字関分字衣掛)
 5……新家忠男氏宅庭内(筑紫郡太宰府町大字太宰府字横岳)

(単位 cm)

	礎石の大きさ		柱の納穴		方立穴			扉の回転軸穴		備 考
	縦	横	径	深さ	長さ	幅	深さ	径	深さ	
1	300	230	無		(A) 48 (B) 33	23 不明	13 7			2面が欠失
2	85	60	不	明	32	13	6	10.4	6	2面が欠失
3	240	140	無		33	12	6	11	6	完 全
4	226	88	16.5	9	25	14	8	15	7.5	完 全
5	130	90	不	明	26	12.5	5	16	9	2面が欠失

Fig.264 水城門礎実測図・計測値一覧表

これらの文献を抜粋して集めた武谷水城によれば次頁上段の如くである。⁽¹⁾

また大正初年中山平次郎氏と実地踏査を試みた竹内榮喜(陸軍少将)氏はその職業から戦略的見地での観察にすぐれていたようで、「従来の水城を距ること西方約一里の大土居及び天神山に於て水城と同一構造の土壘らしきものを見出し、又大土居と水城との中間平地稲田中に於ても概ね同型の土壘と見做すべき不完全なる遺趾の点在せるを見出たのである。⁽²⁾」と述べられ、今日知られている大土居、天神山、上大利(小水城)の3水城を発見している。さらに『八幡愚童記』に記された大堤前面の深田についても「往時水城の前に水湟の如きものがあり、夫れが年を経るに従ふて深田に化したものと考へられぬこともない⁽²⁾」と指摘された点は、後年昭和50年(1975)発掘調査によって幅60mの外堀遺構の存在が確認された⁽³⁾ことに照して、威服すべき予見であったといえよう。

竹内榮喜の
水城観察

◎太宰管内志 東西長五百間許りあり、其間絶えたる処六十間許りあり、東方の堤百五十間、西の堤三百二十三間、堤の高さ五間根盤二十七間あり。

◎筑陽記 土手東西に分る、中一町許崩れ東方長さ百六十間余、西方長二百四十間余根盤十五間、高四間、

◎靖方溯源 水城堤坊東堤百五十六間、水城村西堤三百二十三間、吉松大利村二属ス、(吉松ハ今水城村ノ大堤上今耕地トナル、其間一町余堤址ヲ存セズ、統風土記に堤高五間、根盤二十七間とあり、

◎筑前旧志略 統風土記ニ同シ

◎福岡県地理全誌 統風土記拾遺ニ同シ

◎太宰府名所誌 東の残堤長百九十二間、西の残堤二百八十六間、東西の間絶えて堤無き所百三十間、高五間、根盤三十九間、馬路三間、

◎大日本地名辞書 統風土記水城址、今東の堤百五十六間、西の堤三百二十三間、東西の間絶えて堤無き処一町許り、堤高さ五間、根盤二十七間。

(按) 本文統風土記の記事と相違す、恐らくは靖方溯源水城図の処に、風土記の文を引用せるを以て、両書を混記せしものならん。

◎陸地測量部地図 推測東西の堤長合計約十一町余。

此他尚ほあるべし、以上十種の文籍中、筑前旧史略は統風土記の文を福岡県地理全誌は統風土記拾遺の又を、各々其の條に引用したるものにて、他の文籍は悉く異同あり。甚しきは長さの差二町に及ぶものあり。大正四年十一月大典記念碑建設に際し筑紫郡技手木森善太郎の測定したる結果は左の如し即ち

東堤長百七十六間三尺、西堤三百八十四間三尺、総長五百五十一間、最高五間五尺、根盤最弘十九間一尺七寸、中央欠堤部九十六間、是れ大正四年十一月の測定にして、実地相違なきものなり。然るに本年十月、新國道開通の爲め、東堤の一部削去せられ、東堤は爲めに若干短縮したり。

▼日本書紀の記者が、作二大堤二貯レ水。名曰ニ水城一と記したるより、自然城の字に意を留めず、堤を主体としたる結果、後世終に水城の真意義を覆却し、尋常一様の堤坊なりと誤認するものを生ずるに至れり。水城大堤が尋常一様の堤坊に非ざると共に、又た朝鮮式單純の堡壘にも非ず、記者の如きは從來由緒ある文字を文字の條に存し、事実を事実として認め来りしものなれとも、爾後は其の特種なる築造に鑑み、之を堡堤と称せんと欲す。(みづき)

中山平次郎の水城観察

上述してきた中世から近世にいたる水城の外観・規模についての概要紹介につづいて、水城大堤の近代科学的観察手法を導入して水城研究を推進させた最初の人として中山平次郎があげられる。中山博士は明治39年(1906)福岡医科大学(九州大学医学部の前身)教授として福岡の地に至り、大正元年(1912)より考古学に関する活動を始めた。大正2年8月6日、折から国鉄鹿児島本線の複線化工事のため、水城の鉄道切断部の東面拡大工事が開始されているところに遭遇した。博士はかねてより『靖方溯源』(1891)に「汽車鉄路 堤址ハ土ヲ盛ル厚二寸許、其上ニ木葉木枝ヲ積ムコト厚一寸許、縦横杭材ヲ配置シ、之ヲ築キタルコト、鉄路開鑿ノ時ニ発見セリ」という水城断面についての記載に注目していたので翌7日以来数回にわたって踏査したようである。⁽⁴⁾ 氏の考察はいかにも科学者らしい緻密な観察が加えられる。以下要点を摘記してみると、

- ①「水城の陸側と海側との高低を検し、貯水池の大きさより水の分量を推測し、堰口が開放せられた場合に、此水が如何なる勢を以て、如何なる広さの地域に奔流するであらう歟と想像し来ると、貯水の流勢のみを以て、果して敵軍を阻み得べきや否やが疑問になる。水城の前面には、泥沼地若く



Fig.265 晩年の中山平次郎博士と自署
(1950年11月西日本文化賞受賞時に九州大学にて(79歳))

は滄池等の放漏した水を受け漏れる設備が施されていたのであらぬ歟とも思はるる。」

- ②「陸地測量部の地図によって、水城の長さを測るに際して、注意すべきは、吉松の里道より以西土居の山迄の部が約一町許（続風土記拾遺によれば五十間）山地の突角の様に描かれている事である。（中略）要する処吉松切通以西の土堤は、人工的の築地ではなく、山地の突角を利用したものと思惟すべきのであって、此事と東端なる丸山付近に於ても、自然の山角が利用せられている事とを対照すると水城を築造するに際して、其位置を自然の山地が突出した要地を選び、人力を節約せんとした趣が見ゆるのである。」
- ③「今の国道と水城との交錯点、即ち丸山下の処に、一の関門があったは、此付近より古瓦が出で、又ここに関門の礎石が遺存しているによって確実であらうと信ずる。」
- ④「丸山の関門の方は殆んど疑なきものとして、下大利吉松間の里道の処に関門あったや否やは、予に疑問であったが、これを確むる機会を有せなんだ。其後予は続風土記拾遺を読んで、『堤の中東西に両門を開けたり、云々、西門は博多または肥前松浦等に至る、云々、西門の址には礎石も巖然として有』（此礎石と称するものは長さ一間許、幅四五尺、厚さ一尺内外、柱穴の有無未詳の大石であつて、今吉松の小川に架けられた石橋となつてゐる。此事も高原児島両氏の好意によって識を得た）その辺には古瓦も多く散在せしが、（後略）白木原より国道を右折し、所謂西門址に来て見ると、里道の東側の土堤下に三個の大なる割石が横わり、水城切通の中程に、又三個の大なる割石が横に一線を劃して並列し、尚土堤の断面にも、二個程稍大なる石が挿まっている。村民の中未だ未だ多くあつたと予に教へてくれた人があつた。」
- ⑤「割石の他に、西門の実在を証明するに足るべき物件を得んと欲し、予は甚だ容易に其目的を達した。吉松の切通の付近に、多く散在せる古瓦の破片がそれである。此辺には人が多く来らぬ為にや、瓦片が未だ多く遺存している。廻覧した丸瓦、唐草瓦、平瓦の破片は、証拠品として過日この地から拾ふて来たものである。（中略）瓦片を包含したる断面は、切通の東西両側に見ゆる。（西側のものは道路より少し高き、上面平らかなる段面地をなし、その断面に古瓦が露われている）瓦片が土堤の断面より出る事は、創築の後土が積み改められたを示している。吉松の切通は今幅二間許の隘路となつてあるが、昔作らの道路とは考え難い。断面に埋没せる瓦片より推察すれば、此部は往昔幅広く開通し、後世何等歟の理由により狭められたと考へねばならぬ。」

さらに水城土堤の断面について詳細な観察記録があるが、繁雑であるので省略してその結果のみ抜粋しておく。

- ⑥「以上の断面検査の結果によれば、水城は築造当時、平地の上に先づ根堅めとして、粘土質の土壤を以て、幅廿二三間、高さ一間半乃至二間の蒲鉾形の低く平き長堤を築き次に、これを被ふに多量の砂土を以てし、隆起段階等表面より見るを得べき各部を造つたものと察せらるる。」

また大堤断面に見える土壤の採掘所についても考察をすすめた。基底部粘土層の上層に細砂混り土壤を見て、御笠川の川砂が使用されているのではないか。さらにまた水城西方の山地をも検討して以下のような結果を得ている。

- ⑦「水城切断部の上部より出る土質は、川砂のごとき粗大の砂礫を混じたものでなく、河床の砂土と符合せずして、かえつて西方の山地を構成しているものと同等である。また水城西方の山地には、帯赤色の砂土層の下に、所々自然の粘土層が露出している処がある。御笠川に近きところはいざ知らず、鉄道切断部付近の堤防築造の材料は主として西方の山地より採取せられたと思はねばならぬ。」

つぎに水城下底部粘土層の断面に発見された樹木枝葉についても、水平な出土状態で直立するものはないこと。枝葉の方向は不規則なるも、一個所に同種木葉があるときは同一方向に向

い枝付のままで発見されること。木葉の数十葉が圧搾されて重なって固着して発見されることも少なくないが、「その全体の厚さは一二分に過ぎぬ」ことなどを指摘し、8月25日の黒板勝美博士の再調査で「水城最高線下の地を掘り下げ、杭材の有無」の検索を依頼して『靖方溯源』にみえる「縦横杭材を配置」を否定された。

⑧「上述の所見に徴して、予は水城の基礎工事とも称すべき、深部の粘土層の構造を究知し得たと信ずる。幅二十二三間、高さ一間半乃至二間なるこの層は、決して縦横杭材を配置し築造したと称すべきものではない。二三寸乃至五六寸（稀に九寸に至る）の厚さに粘土質の土を盛り、覆うに葉付の樹枝を以てし、更に同種の厚さに土を積み、更に葉付きの樹枝を布き、かくして一間半乃至二間の高さに築き上げたものでなくてはならぬ。樹枝木葉がある土質と他の土質との境界より出で、その位置が水平になっていることはこれ以上に考ふべき途がないと思ふ。」

つぎには発掘された「枝葉その物の性状」の学術的価値にふれ、天智時代に比定されることを指摘して、水城深層内のものは「よく原形を保ち、その種の何たるかを鑑別しえべき状態にある」ところから樹種同定に及んでいる。

⑨「木葉の種類は甚だ多様であつて、殊に殼斗科植物が多きことくなれども、稀に茅サルトリイバラ、または羊齒科植物等の草木が混在せるは注目すべき所見である。黒板博士はシダの一種の一葉をえられ、予は中ノモトリウの一片を見出した。なおシダが出たとはその後予が多くの人より聞知したところである。水城の築造は、書紀には単にこの歳云々とあつて、月が不明なれども、発見せる植物によれば、鉄道切断の付近は、晩春より秋の間に築かれたようである。」

⑩「発掘時に何か人工品を発見したならば、捨てずにおくよう依頼しておき、数日後に行つて見たところ、数個の祝部土器の破片が保存されてあつた。これは今予の手許に預つてある。また予は一村民より過般「モッコ」の一部と思はるべき、細で作つた物が出たことを聞いた。（黒板博士は深部の粘土層より、草鞋をえられたといふことであつて、甚だ珍奇なる発見物であつたと思ふ）なほ予の採集したものの中に櫛板の一小片と思ふものがあつた。」

⑪「この大堤は上述のごとく全長約十一町に亘つたものである。自然の山地を利用した部を除いても、東西両端の距離は約十町ある。その中御笠川付近の約百間には、初めより土堤がなかつたと仮定し、また堤防の断面が、便宜上高さ五間、盤根三十五間の二等辺三角形であると仮想して、その積土の量を計算してみると、実に九百四十五万立方尺といふ多量に上るのである。実際における積土の総量は、更に多大なるものであらうと思ふ。」

さらに御笠川貫通部の土堤がない部分についても考察を及ぼし、『筑前国統風土記拾遺』に松杉等の大材がこのあたりから発掘された記事に注目した。そしてこの頃行われた御笠川の改修工事で「地中に石垣が埋没したるを発見せられた」という情報とも勘考して、

⑫「今堤が断絶している御笠川付近と、今なほ現存している土塁部とは、築造の方法を異にしていたものと考えねばならぬ。予をして想像を逞しくせしめんや、予は御笠川貫通部には元来水門があつて、付近には一定区域の間、石垣があつたと考ふる者である。元寇防塁といひ、また高祖山の怡土城址といひ、すべて民居に近き往時の石垣は、後世心なき村民の手によつて取崩さる傾向があるのである。水城においてもまた築石を取去らんとするがため、堤が崩壊せられ、終に今日見るとき一部において断絶したるとき現状を呈するに到つたのでありはせぬやと思考する。」

以上、今日からほぼ1世紀も以前に、科学的な透徹した観察力と方法で真相究明に迫ろうと

された中山博士のすぐれた先見的予察は感服するのみである。現在我々が到達している水城跡についての知見は、そのほとんどが昭和45年(1970)以降の発掘調査と学際研究の成果に拠っているが、それらの知見を予感していたかのような中山博士の諸提言は、改めて再認識させられるとともに研究史上再評価すべき位置にあるというべきであろう。

水城跡の発掘調査の画期となったのは、昭和5年(1930)の国道拡幅工事にともなう木樋の発見であった。東門西側民家の井戸掘穿によって、「地面下一丈ばかりに達するや、偶々此の樋に掘り中てたのである⁽⁵⁾」(第3発掘地)。調査にあたった長沼賢海氏はこれに続く南側(第2発掘地)、さらには樋の入口を発掘すべく大堤の南側で掘りあてた(第1発掘地)。つぎに樋の出口を求めて大堤の北側(第4発掘地)に抜けていることを確認した。かくして大堤の南(内側)から北(外側)に緩傾斜で木樋内を導水し、その総長は約80mに及ぶことなどが知られた。この調査成果は後年の外堀遺構(幅約60m・深さ約4m)の確認への手がかり(昭和47・50年1972・1975)までつながってゆくことにもなった点で重要である。以後昭和45年(1970)まで発掘調査は行われなかったので、上述した中山・長沼両先学による調査と考察所見がながく水城の構造として認識されることとなった。

長沼賢海の
木樋調査



Fig.266 水城東門跡周辺発掘調査地域図
(第1～5発掘地= 1930年・1～5T= 1975年)

2) 水城と大宰府都城

大宰府都城
における
水城

大宰府都城制論が盛行するようになると、水城大堤はその北限ラインを構成する重要な位置付けとする点では異論はない。また大宰府防衛の視点から水城ラインは東に延びて大野城へ、西に延びて小水城に続くと考え方にも異論はない。したがって水城大堤はそれ自体の築成構造論のほか大宰府都城制論の構成要素と位置づける立場がある。この方面では鏡山猛氏の長年にわたる調査研究がある。⁽⁶⁾ 大宰府都城の構成が朝鮮半島百濟最後の王都となった扶餘邑の泗沘都城に似るところが多く、ここに範をとったであろうことも今日では周知されている。

阿部義平の
大宰府羅城
説

日本における都城制の代表は、唐の長安城に範をとる条坊制方格地割をもつ畿内の藤原京や平城京が周知されている。先行する非条坊式都城として飛鳥京があげられる。しかしこれら首都例は山城や京城を囲む城壁（羅城）などをともなわず、中国・朝鮮三国などの系譜をひくものの、これら防衛施設を欠落している。その意味では大宰府都城域を防衛する外郭施設として、北限ライン（大野城・水城・小水城群）と南限ライン（基肄城・とうれぎ土塁・関屋土塁）がはやくから認知されてきた。1991年、阿部義平氏はこれら防衛施設をともなう城郭都市の典型として大宰府をとりあげた。⁽⁷⁾ 氏は「宮が遷されたことがないので京とは呼ばれないが、都城の一形態と評価できる」とされ、「朝鮮半島の都城よりも雄大な構想を持つもので、（中略）自然地形を最も最大限に利用した都城の型式」で、「都市城壁をもたないとされてきた日本都市の歴史をも再考させるもの」と言及している。

阿部氏の提示した大宰府羅城域は、上述した北限（北羅城）ラインと南限（南羅城）ラインは従来どおり容認し、新たに地形を案じて南・北両ラインの西端と北端をそれぞれ南北に結んで西限（西羅城）ラインと東限（東羅城）ラインを想定し、大宰府を防衛するための四至を画する羅城域を設定する考えである。この説に従えば、西羅城ラインは北西隅にあたる小水城群西端の天神山土塁が南に折れて丘陵端にとりつくところから、そのまま尾根ぞいに南行して牛頸山（標高448m）を経て権現山（標高626.2m）に至る。その間約10kmである。ここを南西隅として東行する尾根線をたどると約5kmで基肄城にたどりつく。ここから南東にあたる関屋土塁まで下る想定線上には、千塔山丘陵の西側に残る「とうれぎ土塁」がある（1976～78年調査）。両土塁は千塔山丘陵を南東角として、前者は北東へ、後者は北西に延びて基肄城とあわせて南羅城線を構成している。

次に東羅城線については、北羅城線の大野城を東行して宝満山（標高830m）を北東隅としてこれから南行して高尾山東方を通り、宝満川の西方低地を川に沿うて阿志岐、永岡と南行し、筑紫神社を内側にとりこんで大振山に至り、さらに関屋土塁へと尾根部をたどりゆくラインを想定している。しかし東羅城線側の低地部には人工的な土塁などは残されていない。すなわち丘陵の間を宝満川に流入する小河川や谷部を横切る7ヶ所以上に消失した小水城の存在を想定しなければならないが、このことを強弁するには無理があろう。要するに阿部説では東西南北の四至すべてを閉塞する羅城ラインが存在したと考えている。

大宰府羅城
説 批判

このような阿部説が認められるとすれば、すでに上述したように大宰府都城の手本にされたといわれてきた百濟の泗沘都城よりもさらに雄大な構想のもとに、自然地形を最大限に取り入れた都城制を実現したことになる。しかしこのような羅城観を容認するには、なおいくつかの疑問も浮上してくる。

まず四周が完全に閉塞された羅城線を想定するためには、丘陵間の低地部すべてに人工的な土塁が存在するはずである。阿部氏も「丘陵間も道路や堤となって要検討ケースがある。また羅城想定地も必ずしも1ヵ所でない地点もある」と言及される。氏の提示した羅城線は「有力なラインを図示した」ものである。現在北限ライン上で大野城から東行して宝満山に至る途中の只越付近。宝満山から大振山を経て関屋土塁に至る東限ライン上に想定される数ヶ所の土塁必要部についても確証は得られていない。すなわち丘陵上にとりつくあたりでは、比高の低いところや、外側が緩傾斜するところに土塁を築成し、あるいは前面を切落し、あるいは濠を掘

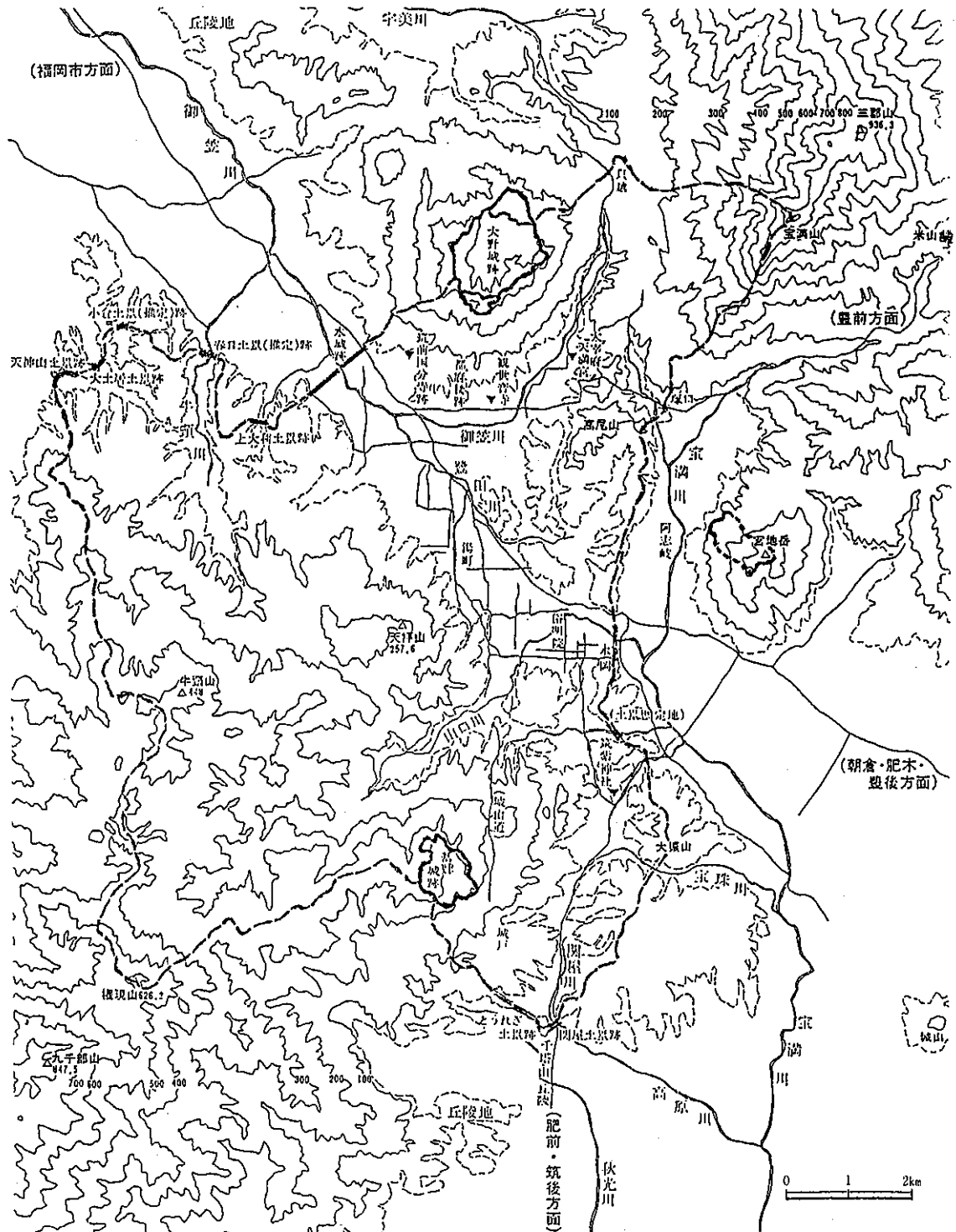


Fig.267 大宰府周辺の地形と羅城の推定復原
(阿部義平「日本列島における都城形成」に加筆)

穿するなどの対応が必要になってくるところである。

さらに視点を変えて羅城の西限ラインを、天神山土塁の西端から南行して権現山に至る尾根線沿いに考える時、羅城内の西北寄り丘陵裾の大土居土塁付近から、南東端に近い基肄城を結ぶ山麓線以西は羅城域西半の大部分が山岳地帯を構成していて、古代都市としての活動機能はほとんど果しえないのである。

一方、東ラインが想定されているところの永岡付近は東行すると朝倉・豊後方面に、また南行すると関屋土塁を通過して筑後・肥前方面に至る交通の要衝である。近年筑紫野市岡田で発見された幅約10mの東西道路遺構は、永岡付近から豊後方面に通ずる官道（豊後道）にあたっている。

阿部氏が提起した羅城説は、大野城・水城・基肄城を明確に羅城ラインにのせてその役割を説明できる点では従来の防衛体制論をより明確にできることとなった。しかし大宰府の設置とその防衛体制の整備を急がねばならなかった天智朝の緊急事情を考えると、まず第1に必要な防衛ラインは、福岡方面（博多湾周辺）から侵攻してくる外敵に備えることであり、大野城～水城～小水城で構成される北限ラインであろう。つづいては南（有明海側）からの侵攻に備える基肄城～とうれぎ土塁～関屋土塁を結ぶ南限ラインである。このラインは大宰府に通ずる地峽部を閉塞する最適の地点である。緊急を要する短時日の間で北から、南から至る外敵の侵攻に対処するには、この南・北両ラインの造成がまず必要であったことは論を待たないであろう。両者を結ぶ西限ラインとされる天神山土塁～牛頸山～権現山を結ぶ尾根線は自然の天険山地であって、一部に造成を必要とすることもなかったのである。同じく北限ラインの東行延長線は、宝満山から北行して三郡山～砥石山～若杉山～鉾立山～犬鳴山～西山とつづく三郡山地の天険が福岡平野の東限を阻んでいる。北から襲来する外敵に対しては大野城以西の低地部に人工の防衛ラインを造営すればこと足りると考えられたのであろう。

また宝満山から南行して関屋土塁に至る想定東限ラインについては、上述したように低地部を連結してゆくような人工防衛遺構（土塁など）は発見されていない。有明海方面から侵攻する外敵が宝満川沿いに大振山山地を永岡付近まで東方を迂回して大宰府に至るという攻撃戦術は得策とはいえない。朝倉・豊後方面に通ずるこの方面は、元来防衛ライン内部に入ると考えられていたので必要ないとされていたのであろう。

以上のように検討をすすめていくと、緊急を要する防衛体制の状況下では、現実問題として北限と南限ラインを設営すればこと足りたのであり、あとは自然の天険に依拠すればよいという発想であったろう。当然のことながら大宰府都城の防衛という観点から大野城・水城の築成を指導した兵法家でもあった亡命百済の高官たちは、大宰府周辺の地勢全体を戦略的見地から研究して整備を考えることとなる。そして大宰府周辺の地勢と防衛施設の在り方が、彼等の故地扶餘の百済泗沘都城に範をとることになったといわれるのも容易に肯定しうるのであろう。

百済王都・
泗沘羅城と
水城

泗沘期の王宮跡・背後の扶蘇山城・羅城などについての考古学的調査の進展は多くの注目すべき成果をあげている。⁽⁸⁾ 以下必要な範囲でそれらにふれておく。泗沘都城は錦江（白馬江）が扶蘇山城北麓を西行して南行に転じたのち、さらに大きく東に曲流する東岸地域に形成された広い平地部を城内にとり入れている。扶蘇山城はその東約500mに在る青山城と結び、さらに山丘を横断南行して錦江に至る土塁線が北～東羅城線を形成する。さらに扶蘇山西側から

南行する錦江に沿った西羅城土塁線、東羅城内の中井里付近から西行して宮南池に至る南羅城線も想定されている。⁽⁹⁾ 加うるに泗沘羅城の西～南側はさらに曲流する錦江が天然の外郭を形成している。このような景観は、これを錦江の西～南から眺めるとき、水に浮ぶ泗沘都城の観を呈している。わが水城も北側から眺めるときは、まさに水に浮ぶ土城の観を呈することとなる。泗沘城の構成に範をとる築城家の指導によったところからも低地に築造する長大な土塁である実状にかんがみて、その前面に“人工の錦江”をイメージすることでより防衛体制の堅固さをはかったと考えられる。

このほか都城域の四至には4つの調整池があったとされる。すなわち北東隅の青山城の南(～東)には月含池、東羅城南端には玉盃池、南羅城の西端を画する宮南池(史跡135号)、西羅城の中ほど切れ目の遊水池がそれであり、都城域の外濠の役割をしていたと考えられている。⁽¹⁰⁾

忠南大学
校の泗沘
羅城・王
宮跡の
調査

以上のような泗沘羅城観は1980年代に形成されてきたものであったが、忠南大学校百済研究所が2000年に実施した羅城の精密地表調査や発掘調査で、改めて羅城構造への検討が加えられ、以下のような結果が得られた。⁽¹¹⁾

- ①まず羅城については、羅城の平面形態と規模は扶蘇山城東から青山城(0.9km)へ、さらに青山城～石木里～陵山里～塩倉里(5.5km)へと総延長6.3kmの羅城で半月形をなしている。
- ②城壁の築造技法は内托盛土を基盤に持った幅3mほどの石築城壁となる。高さ3～4m。傾斜度は外側で70～75°、内側は15～30°と緩やかである。
- ③城門跡は北羅城の青山城北門。東羅城の5門跡が確認された。
- ④南羅城と西羅城は、考古学的調査でその痕跡を確認できなかった。むしろ河川を天然の濠として活用する視点から白馬江の機能を再評価すべきである。同様なことは北羅城と佳増川でも考えられる。

以上の成果からも知られるように、泗沘羅城においても四周を閉塞するような人工羅城は形成されず、西方や南方は白馬江に託したとみる考え方が浮上しているようである。但し当初想定された西羅城・南羅城はその基礎となった丘陵線自体をその内境と認めれば実質的な羅城境域を示すこととなり、その不備をさらに白馬江を外境と見立てるならば、上述したように水城の発想もこのあたりに求められるのではないかと思考している。

つぎに北羅城をも構成する扶蘇山城は総延長2.5kmの包谷式で版築城壁で築造され、北・東・南門跡と雉などの施設が確認されている。山城の南麓には王宮跡が存在し、1982年の官北里遺跡調査を端緒に発掘調査が継続されていて新しい成果があげられている。この山城と王宮の配置関係は、まさに大宰府における大野城跡と政庁跡の状況に置きかえられることもはやくから指摘されてきた。

泗沘都城
の部巷制
とその系
譜

ところで泗沘城王都内は『周書』百濟伝に上部・前部・中部・下部・後部の五部に区画されていたとあり、また『隋書』百濟伝には畿内を五部とし、部に五巷があったとされる。郷校付近で「前部」、「上口前口川自此以□□□」銘標石が、東南里で「上口乙瓦」銘瓦が出土している。⁽⁹⁾ 田中俊明氏は旧国立扶餘博物

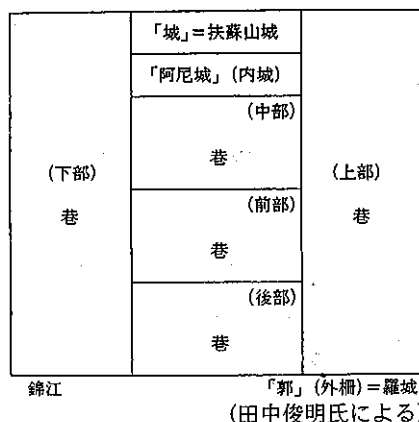


Fig.269 泗沘城平面構造概念図
(五部配置推定図)

館（現国立扶餘文化財研究所）前の蓮池跡とその東南の双北里遺跡で「中口乙瓦」銘平瓦が出土しているところから、双北里遺跡周辺を中部地域に想定し、高句麗王都の五部の配置なども参考して泗沘城内の配置復元概念図を作成した。⁽¹²⁾氏によれば五部のなかにそれぞれ五巷があった。五部は熊津期からあったが、巷は泗沘期になってからのもので、南朝の建康に見られる。「百済と中国南朝との関係からして、これは明らかに建康の影響といえることができる。建康は里巷制であったが、百済では部が先にあったため、巷のみとり入れたのであろう。泗沘城は、部巷制であったといえる。」またこの部巷制は、「泗沘城には条坊制は施行されなかったとみてよい」ので両者は関係ないこととなる。現在の南京市にあった南朝建康城は南朝（318～589A.D.）270年にわたる漢民族の都城であった。建康城の復元については秋山日出雄氏の作業がある。⁽¹³⁾建康城は「南北に長い、ほぼ矩形に近い都城」で西北部に張り出した部分が加えられる。都城の構成は内城と外郭の区別があり、墳墓地は城外に設けられた。宮室は都城内の北寄りに在った。また玄武湖・燕雀湖などが内城をとり巻き、外部は付近の山岳・丘陵に連続して防衛線を形成し都城の西側には揚子江が南流する。このような建康城の形態が百済泗沘城の形態にも影響を与えることとなったのである。中でも揚子江・羅城・池沼の在り方、羅城内に条坊制が採用されなかったことなどは注目しておくべきだろう。

これまで水城・大宰府に発して百済泗沘城の構造、さらに南朝建康城へとその系譜を求めて遡上してゆき、その原形をたどりえたと考える。再び水城・大宰府都城に立ちかえてみると、大宰府の防衛線は大野城～水城～小水城群からなる北限ラインと、基肄城～とうれぎ土塁～関屋土塁からなる南限ラインが明確な人工防衛線として認識できるものであり、あとは自然の天険にたよってこれと連結するという考え方で緊急事態に臨む基本対策が立てられたのであり、すべてを人工防衛線で構成するという発想ではなかったことも知られた。そしてこのような考え方はすでに泗沘都城の羅城構成段階、さらには南朝建康都城段階から存在したところであったことも明らかになった。水城にあっても、小水城群で山丘と交互に人工土堤が配されてゆくところにこの発想が端的に現れている。

水城大堤の構築にあつては、上述したようにその基底部に樹木枝葉が敷かれる工法が行われていたことは1910年代から知られていたが、1970年以降の本格的発掘調査によってその実態はいよいよ明らかになった。版築盛土の最下層に厚さ40cmの樹木枝葉（粗朶）を敷いていて、植物遺体の同定によれば、木本12種（常緑性9・落葉性3）・草本1種があり、その季節についても5月中旬～7月中旬頃に伐採されて敷き埋められたと推定されている（「敷粗朶工法」）。そしてこのような土塁築成工法について地盤工学的調査がすすめられて、大堤北側のり面は1:1.1～1.2の急勾配となし、さらに下成土塁にあたる約10mの土段を設けてその前面に深さ4mの大溝を設けたことは北方からの敵襲防衛に効果的である。沖積平野に高さ13mの急勾配土塁を築くためには、「押え盛土工法」が必要となり、下成土段をつくらざるをえなかったこと。また敷粗朶の使用についても、軟弱な地盤面上に豊富に敷かれていて今日いうところの「補強土工法」を併用したものとして注目されている。

水城の構築
工法

つぎに水城西門跡の調査（第26次）で3期にわたる変遷が明らかにされた。

水城西門跡
の3期変遷

- ・第Ⅰ期 7世紀後半。下成土塁上にテラスをつくり、北側にむかって「ハ」字形に開く。
- ・第Ⅱ期 8世紀代。柱堀方4個検出し、正面1間・奥行2間の四脚門である。鴻臚館式

軒瓦を使用。大宰府政庁Ⅱ期の整備拡張に伴う改修。

- ・第Ⅲ期 9世紀代。門遺構は発見されていないが、土塁頂部に瓦が多く発見されて楼門が存在したと考えられている。下限は明らかでない。

古代山城との運動的変遷

これと同様な変遷は大野城でも考えられ、第Ⅱ期には礎石建、鴻臚館式屋瓦が使用されている。但し第Ⅲ期の上限は宝亀5年(774)の四王寺建立にさかのぼる。さらに大宰府政庁跡でも3大別され、第Ⅱ期で礎石建、鴻臚館式屋瓦が使用され、その上限は古瓦の方面から710年代頃に考えられている。第Ⅱ期の下限は天慶4年(941)に藤原純友によって焼打ちされた事件に求められ、その再建から第Ⅲ期となる。3遺跡の共通するところは第Ⅰ期の始まりがほぼ660年代の天智朝にあたることと、第Ⅱ期の始まりが共通する使用屋瓦から8世紀初～前半代に求められることである。おそらく第Ⅱ期の改修は大宰府が関与して一斉に行われたと考えられる。このことはさらに金田城跡(対馬市)、鞠智城跡(熊本県)などの大野城跡とならぶ朝鮮式山城でも、現在進行中の調査成果とも共通するところである。大宰府第Ⅱ期の整備は、これら他地域施設も含めて大宰府主導ですすめられたのであろうと推察している。

大宰府政庁跡との運動

平成10年(1998)に開始された大宰府政庁正殿跡の発掘調査では従来大宰府Ⅰ期とされてきた時期はさらに3時期に区分されている。⁽¹⁴⁾ すなわちⅠ期古段階(7世紀第3四半期)・Ⅰ期新段階(7世紀第4四半期)・Ⅱ段階(8世紀初頭)である。通じて掘立柱建物で、その配置関係には大宰府第Ⅱ期にみられるような官衙型配置はまだみられない。大宝律令の成立した8世紀初頭までに大宰府官制も成立し、このような背景のもとに大宰府Ⅱ期の官衙型配置も実現したと考えられる。その契機となったのは持統天皇3年(689)6月に成立した飛鳥浄御原令に求められるであろう。

大宰府条坊制の施行時期

現在、大宰府都城の条坊制の遺構は発掘調査の成果では8世紀前半までさかのぼることができる。すなわち大宰府第Ⅱ期に相当する。大宰府の拡張整備段階で、“遠朝廷”^{とおのまかど}として外国使節に応接する大宰府の職務が整備されてくると、唐や新羅と応接するためにも首都平城京に準じた環境整備が必要となってきた。条坊制都城としての整備もこの段階で導入される必然性が生じていたと考えられる。のちに「此の府は人物殷繁天下の一都会也」^(鑑和名抄)といわれた盛況に至る始まりもⅡ期の出現にあったといえよう。現在の地に大宰府政庁が移され、水城・大野城も造成された天智朝にあつては、その緊急性ともあいまって経済活動まで視野のなかに入れた完全な羅城制や条坊式都城の形成は望めなかったと考えられる。建康都城－泗沘都城－大宰府都城という流れが成立するならば、大宰府都城第Ⅰ期は非条坊制都城として発足したであろうと考えられる。すなわちまず防衛体制先行の都城として出発せざるをえない状況を考えれば条坊制の施行は必須条件でなくてよいのである。

3) 水城類似の遮断遺構

水城大堤のように平地に造成して、内と外を明瞭にするために遮断する目的で造られたとみられる土堤遺構が九州・瀬戸内地域に存在する。近時これらについても注目されてきている。⁽¹⁵⁾ ここでは大宰府周辺の二、三の例について、参考に資することとしたい。

上津土塁跡 ①上津土塁跡⁽¹⁶⁾(福岡県久留米市上津町字東上村・馬場・亥ノ子角・平野)

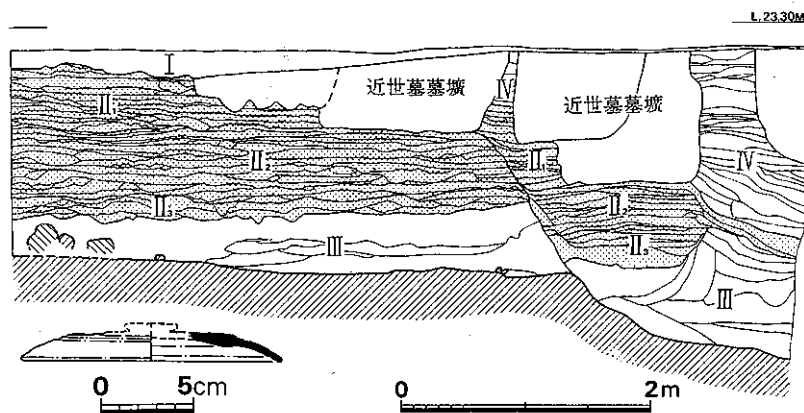


Fig.270 上津土塁跡土層図と出土須恵器実測図
(第1トレンチ土層図・第2トレンチ出土須恵器)

上津町東方の明星山から西にのびる二つの丘陵（北側が浦山丘陵・南側が本山丘陵）の、西端谷部を遮断する南北方向土塁である。ここは景行紀にみえる「藤山」道や国道3号線が通過する交通の要所である。昭和59年(1984)の発掘調査で人工の版築盛土であることが確認された。本来の土塁幅約20m・高さ5m以上・長さ約450mと推定され、水城に類した古代防塁跡ではないかと推測されるに至った。調査では土塁を横断して土層断面の観察が行われていたが、そのうち第1トレンチでは以下3層に大別される基本層序が明らかになった。

- ・ I層 表土・近世墓等による攪乱層
- ・ II層 版築層で使用土の違いで3細分される (II 1～II 3)。
- ・ III層 青灰色粘土層・暗褐色泥炭質層で「自然木や枝葉・木の実(ドングリ)などを多量に含んでいる。」とくに西半分ではII層以下が約50cmほど地山の落ちこみ内にずれこんでいる。
- ・ IV層 西半部のII層以下のずれ落ちの上に、さらに版築盛土された土層。
- ・ 地山 砂層

以上の層序のうちII層中から土師器片数点が出土したが時期決定の確証に欠けるといふ。また西方の第2トレンチでII 2層を覆う「版築層の二次堆積とみられる第V層」から8世紀後半代の須恵器杯蓋片が発見された。

第1トレンチの層序で地山(砂層)直上のIII層に樹木枝葉類が含まれていた点は、水城大堤の下底部にみられた敷粗朶工法と共通する状況として注目される。また二次版築層から8世紀後半代の須恵器が発見されたことや、当初の「版築層中から出土した土器の下限は古墳時代後期頃とみられ」ることなどから、「おおそ7世紀代～8世紀後半頃」と推定されている。また「土塁北端と丘陵先端の接点で大石群が出土した」といわれ、調査者はここに門構造施設の存在を推測している。当土塁造成の意図については、大宰府都城南限ラインとされている基肄城～関屋土塁のさらに南に在って、有明海側から南限ラインに至るその外側に位置して、八女地域を通して北上する古道(藤山道)の要所を扼している。のちの筑後国府や朝倉宮地域まで視野に入れた第2南限ラインを想定することも可能であろう。

なお、第1トレンチ西半部にみられた版築層のずれ落ちを、天武7年(679)に生じた筑紫国地震による断層とする所見が出されている。そうであれば、当土塁の第1次造成は水城大堤工事の年代に近接してきて、上記の考え方の有力な支証となるが、ここでは付記するにとどめて

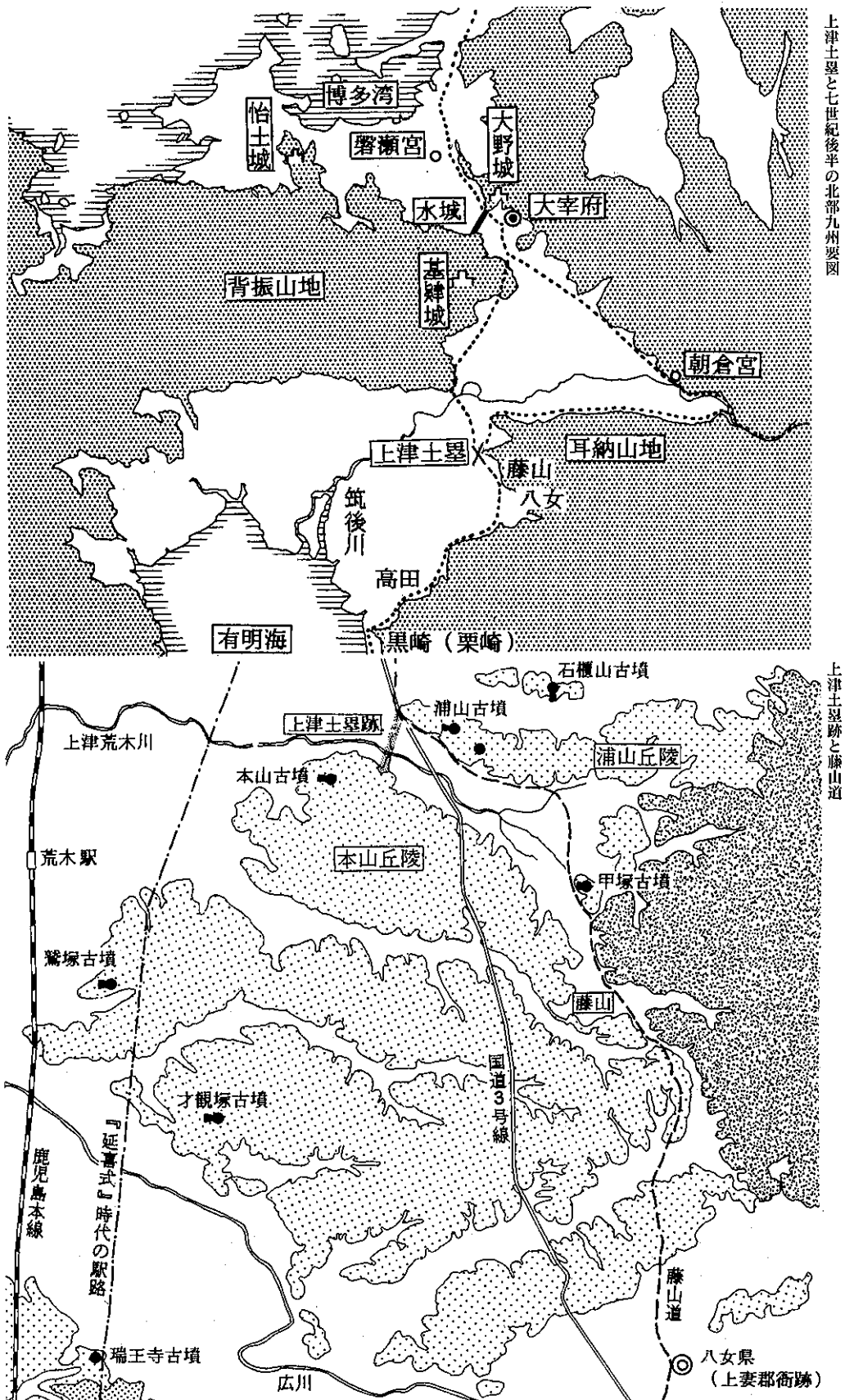


Fig.271 上津土塁と北部九州・交通路

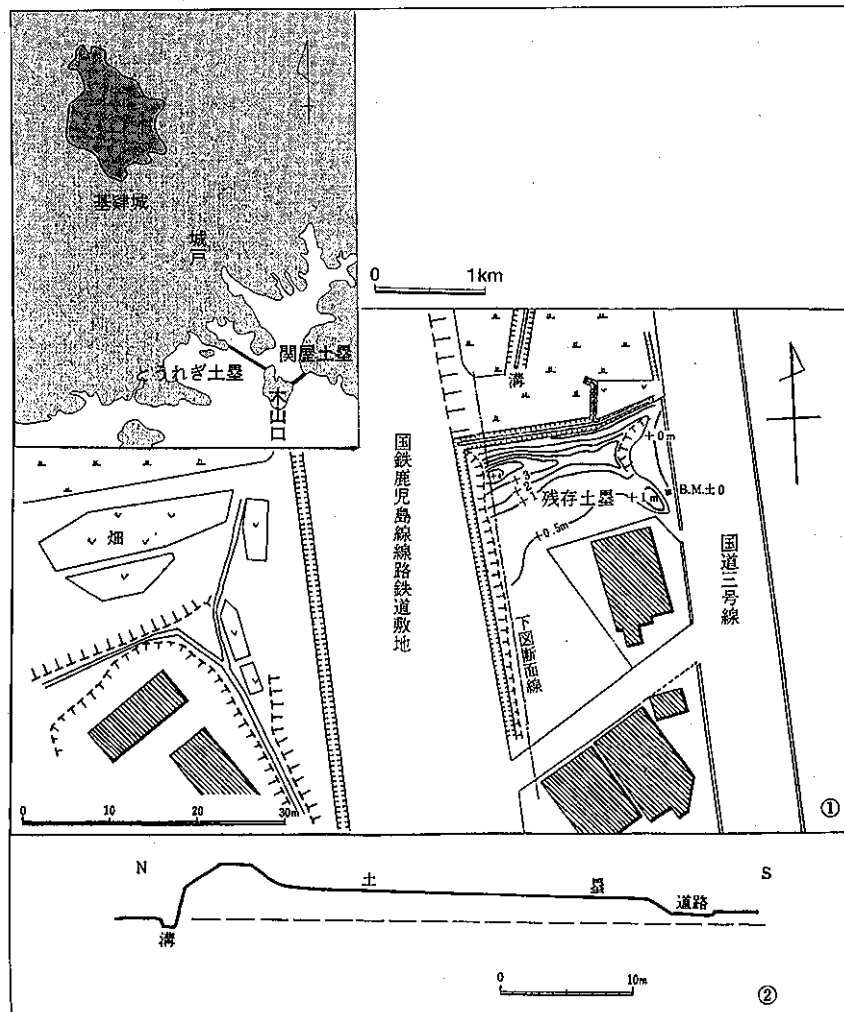


Fig.272 関屋土塁跡ととうれぎ土塁跡
(上：両土塁跡と基肄城，下：関屋土塁跡付近地形図①と築堤断面図②)

おきたい。

②関屋土塁跡⁽⁶⁾・とうれぎ土塁跡⁽⁷⁾ (佐賀県三養基郡基山町)

基肄城跡の東南約500mに痕跡をとどめている2ヶ所の土塁である。

関屋土塁はJR基山駅の北踏切の外側にある。東は国道、西は鉄道路線に切られてわずか20mほどを残す状況である。元来は東西両丘陵を連結していたであろう。花崗岩風化土を水平に積んだ層序が断面にみられる。鏡山猛氏の観察によれば、「土塁は北に急傾斜し、南に低い段を持っている。基底よりの高さ4.8m（最高所）長さ約20m、段の幅15m程度で、水城を小規模にしたものである。堤防は北向きで往時は中央を川と道路が横切っていたと思われ、水門及び城門の設けもあったと思われるが、すでに遺構の手がかりは失われている。（中略）土塁線の北向から考えて、直接には基肄郡広くは肥前国の守りを目的としたのであろう。」

とうれぎ土塁も削平が著しく、関屋土塁の西北約100mのところに千塔山丘陵をはさんで土壇状の基部を残している。大宰府側から肥前に入る最も狭いところで、防衛上の要所である。関屋土塁は東の城ノ上丘陵にとりつき、とうれぎ土塁は西の向原丘陵にとりつき、間に千塔山丘陵を挟んでいる。両土塁は一連の防衛線を構成するものであろう。トレンチを設けて土層観

関屋土塁跡
・とうれぎ
土 塁 跡

察したところでは関屋土塁と同様な版築状盛土であったという。水城と同じ性格を想定して北側の水田にトレンチを設けて探索したが、濠などは発見されなかった。

その後1992年には基山町教育委員会が関屋土塁を調査して版築盛土の下層で敷粗朶を検出した。⁽¹⁸⁾

堤土塁跡 ③堤土塁跡⁽¹⁹⁾ (佐賀県三養基郡上峰町大字堤字迎原)

二塚山丘陵と八藤丘陵の間を遮断するように造成されて肥前道に南面している。総長300mに及ぶと推定され、切通川が中央を貫流するために東西各々110mに二分されている。土塁基部で幅40m、南側田面との比高9mである。東土塁は自然丘陵を成形し、上部に高さ約2mの人工土塁が積まれている。人工土塁の北側には犬走り状の幅約7mの平坦面がある二段築成である。西側はこの犬走り以下の北側斜面が残っている現状である。両土塁の方向は道路側溝状遺構の方向とほぼ一致して、この延長線上にあたる八藤遺跡で道路跡が確認されたところから道路説が有力である。

鬼ノ城山麓の遮断遺構

このほか瀬戸内地方でもはやくから知られている鬼ノ城跡(岡山県総社市)東南麓谷部を遮断する「水城状遺構」と称される土塁などがある。⁽²⁰⁾しかし本稿でこれら遮断施設を本格的に検討するのは本意ではないので、水城の性格を考える上で必要程度ふれるにとどめたい。

朝鮮半島の遮断施設

近時、朝鮮半島や高句麗領域などで谷部や交通路を壘状遺構で遮断した「遮断城」・「関隘」^{かんあい}と称されるものに関心が寄せられている。⁽²¹⁾それらを受けて上述してきた水城大堤や小水城群、類似遺構をとりあげて「遮断施設」の名称のもとに、高句麗山城に付属する遮断城との関係に類似点を求める論考も現われている。⁽¹⁹⁾元来西日本の古代山城跡は朝鮮半島に系譜を求められるものであるから、構成面で共通するところがあつて当然であろうが、政治社会史的状況の相違や築成時の国際関係なども反映して必ずしも同一解釈で処理できないケースがあることも視野のうちにに入れておかねばならない。



Fig.273 堤土塁跡全体図

大宰府防衛体制の構成で、人工の防塁と自然地勢と組みあわせて部分的な北羅城ラインが企画されている状況を見たのであるが、そのなかに水城も小水城群も組みこまれて都城の外郭を構成している。このような場合には、そのなかの遮断防塁のみとり出して大陸の遮断城や関隘に比定するだけでこれらの機能を完全に説明したとはいえないであろう。防衛ラインのなかに組み入れられた視点からの機能も考慮する必要があるからである。

現状からの
総括

また上津土塁の場合は第2防衛ライン的視点と、交通の要所をおさえる視点との両面を備えており、遮断城として、また関隘としての性格が付加されているように思われる。さらに関屋土塁、とうれぎ土塁の場合は、大宰府防衛の南羅城ラインに組みこむ考え方が提示されるほか、直接的には基肄城の遮断城とみる考え方もある。鬼ノ城における水城状遺構の場合は、鬼ノ城山麓の東側谷の出口を遮断していて、はやくから鬼ノ城の外郭施設とする指摘があった。⁽²²⁾ 現状で約320m・幅約40m・高さ約0.5m。平成7年(1995)の試掘で版築状層が確認されたが、時期の確定がなされていない⁽²⁰⁾ (戦国期説もある)。外観上は鬼ノ城関連の遮断城というにふさわしいのではあるが。

以上のように水城類似遺構としてとりあげられた遺構については、研究視点の違いによって解釈も一定しない。要するに未調査部分も多く、またすでに破壊がすすみすぎて正確な情報が得られないなどの現状では、まだ近い将来に解決はのぞめないであろう。

本稿では1910年代における研究史的成果で示された課題をうけて、現在における水城や大宰府関係施設の調査成果を検討して、その到達点を模索してみた。しかし未だ業途中である。さらなる進展を期待したい。本稿の付図については註所掲文献から借用掲載した。謝意を表する。

(2009・1・9稿了)

【註】

- (1) 武谷水城1931「水城史観補新」『筑紫史談』第54輯
- (2) 竹内栄喜1929「太宰府を中心とする国防築城」『筑紫史談』第46輯
- (3) 高橋 章編1976「水城 昭和50年度発掘調査報告」九州歴史資料館
- (4) 中山平次郎1914「水城の研究」『筑紫史談会講演集』第1輯
- (5) 長沼賢海1932「水城の大樋の調査」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第7輯
- (6) 鏡山猛1968「大宰府都城の研究」風間書房
- (7) 阿部義平1991「日本列島における都城形成—大宰府羅城の復元を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集
- (8) 小田富士雄2003「百済熊津・泗沘期の都城制と倭」(国立扶餘文化財研究所「百済泗沘時期文化の再照明」) [武末純一訳・『福岡大学人文論叢』39巻1号2007による]
- 申 鍾國2006「泗沘都城発掘調査の成果と意義」(『同書』)
- (9) 洪 再善1981「百済泗沘城研究」(東国大学校大学院硕士学位論文)
- (10) 成 周鐸1982「百済泗沘都城研究」『百済研究』第13輯 [亀田修一訳1984「古文化談叢」第14集による]
- (11) 忠南大学校百済研究所2000「扶餘東羅城・西羅城発掘調査略報告」
- 忠南大学校百済研究所2000「扶餘西羅城軍守提改修工事区間文化遺蹟試掘調査報告書」
- 朴 淳堯2000「泗沘都城의 構造에 대한여」『百済研究』第31輯 [山本孝文訳2000「百済泗沘都城の羅城構造について」『古文化談叢』第45集による]
- 朴 淳堯「泗沘羅城研究の現段階」(『溝渡』第13号) [李義之訳]
- (12) 田中俊明1990「王都로서 泗沘城에 대한豫備的考察」『百済研究』第21輯
- 田中俊明1991「朝鮮三国の都城制と東アジア」上田正昭編『古代の日本と東アジア』
- (13) 秋山日出雄1984「南朝都城「建康」の復原序説」『檀原考古学研究所論集』第七
- (14) 杉原敏之2007「大宰府政庁のⅠ期について」『九州歴史資料館研究論集』32
- (15) 松尾洋平2008「古代遮断施設(防塁)についての一考察」『古文化談叢』第60集

第Ⅷ章 水城とその周辺

- (16) 松村一良編1986『上津土塁跡』（久留米市文化財調査報告書第48集）久留米市教育委員会
- (17) 中牟田賢治編1978『千塔山遺跡』（基山町文化財調査報告書第3集）基山町教育委員会
- (18) 基山町教育委員会1993『関屋土塁』（基山町文化財調査報告書第23集）
- (19) 上峰村教育委員会1978『堤土塁跡』（上峰村文化財調査報告書第1集）
上峰町教育委員会1998『八藤遺跡Ⅱ・堤土塁跡Ⅱ』（上峰町文化財調査報告書第14集）
- (20) 村上幸雄・乗岡 実1999『鬼ノ城と大廻り小廻り』（吉備考古ライブラリー2）
- (21) 向井一雄2005「外城ラインに関する一考察」『戦乱の空間』第4号
松波宏隆2007「新羅・高句麗地域の遮断城・関隘―圍繞しない城壁について―」『濶渡』第13号
- (22) 高橋護1976「鬼城山・築地山」『月刊考古学ジャーナル』117